

中島 敦 論

—「李陵」に就て—

第一章 二つの「我」

中島敦の遺作「李陵」(『文学界』昭和一八年七月)は、全三節から構成されるが、その内、主人公李陵は第一節と第三節に登場し、第二節には全く登場しない。その代わりに第二節に登場するのは、もう一人の主人公とも言うべき司馬遷である。そして、李陵と司馬遷は、この物語の中では殆ど直接的な交渉を持たない。勿論、司馬遷は、李陵の敗軍を弁護し、武帝の逆鱗に触れて宮刑を受け、その人生に決定的な影響を被るのだが、李陵と司馬遷は親密な交りを結んだ友人同志ではなく、天漢二年秋九月に始まる此の物語の中では、漠北の李陵と長安の司馬遷が相会う機会は一度も無い。この「李陵」という小説の題は、如何にも主人公の名前を取ったものの如くであるが、これは、中島自身によってではなく、その死後深田久弥によって仮称されたものに過ぎない。その為もあってか、この小説の主人公を司馬遷と考える説さえもあり、この小説の題が此の小説の内容に相応しいものかどうかは議論の余地がある。が、こうした複数の主人公を持つ多極的構造

越 智 良 二

(国文学研究室)

については後に触れることとして、差当って、先ず、第一節の李陵と第三節に再登場してくる李陵との関係について見てゆきたい。と言うのも、第二節の長い不在を挟んで、両者の間には埋め難い性格上の不統一があるようにも思われるからである。

「李陵」の第一節は、その殆どが漠北に於ける李陵軍と匈奴軍との戦闘場面に費されている。そして、其処に登場する李陵は、正に典型的な武人である。主観を抑制した客観的な戦闘叙述の中で、李陵の内面が描かれることは殆どないが、然し、幾つか彼の人間像を浮かび上らせる印象的な文章が無いわけではない。例えば、最初歩哨の報告に接した彼は、明朝戦闘状態に入るべく命令を発した後、「幕營に入り、雷の如き鼾聲を立て、熟睡」する。正に軍人らしい豪胆さと沈着さを備えた人物である。そして、その後の戦闘場面では、有能で果敢な武将としての非凡さが描き出されてゆく。こうした彼の性格は、例えば、「李陵は即刻この地を撤退して」「李陵は軍吏に女等を斬るべくカンタンに命じた」「李陵は直ぐに附近の葦に迎へ火を放たしめて」「(傍点論者)といった、迷いのない表現からも窺うことが出来る。そして、愈

々明日は全軍斬死という晩に、李陵は次のような行動をとる。

その夜、李陵は小袖短衣の衣を著け、誰もついて来ると禁じて獨り幕營の外に出た。(中略)中に残った將士は、李陵の服装からして、彼が單身敵陣を窺つてあはよくは單于と刺違へる所存に違ひないことを察した。李陵は中々戻つて来なかつた。(中略)かなり久しくたつてから、音もなく帷をか、げて李陵が幕の内にはひつて来た。駄目だ。と一言吐き出すやうに言ふと、踞牀に腰を下した。全軍斬死の外、途は無いやうだな(後略)

此処に描かれた李陵は、五千の兵の統率者としては洵に相應しい、無私の人物である。この後、李陵の爲を思つて降伏を進言する部下もあつたが、彼は其れを用いない。「陵一個のこと」は捨ておかれ、「全軍」のことが優先される。

以上のような第一節の李陵に対し、第三節に再登場してきた彼は、可成趣を異にした人物のようにも思われる。例えば、乱戦の中に氣絶した彼が單于の帳房で目を醒ました時、彼は、自ら首刎ねて死ぬか、今暫く降伏し乍らも敗軍の責を償うに足る手柄を立てて(單于の首を奪つて)脱走するかについて迷う。彼は後者を選び、その機会を忍耐強く窺うわけだが、その時、彼の心の中には、縦え單于の首を奪つても其れを持つて漢へ脱走しなければ、匈奴は其れを有耶無耶の内に隠蔽するであろうから、甲斐がないという顧慮が入ってくる。そして、この顧慮は、その機会を得ない内に武帝によつて故国の一族を族滅され、「無理でも、もう少し早くかねての計畫(中略)を實行すれば良かった」という後悔を生むことになる。更に、後年、人に知られざることを憂えず一人運命に抗して生きる蘇武に出会つた時、李陵に「冷

汗の出る思ひ」を抱かせるものでもあつた。

惡意的に見れば、この單于の首を奪つても其れが漢に聞こえなければ云々といった顧慮は、對世間的な名譽心に捉われた、極めて個人的なもののようにも見える。そして、それは、先に見た第一節の李陵が持つていた「陵一個のこと」を顧りみない没我的な無私性とは、相容れないもののようにも見える。

それから、又、第一節の李陵は、軍中に潜んでいた女等を発見した時、即座に斬首することを命じた。その中には管敢の妻も含まれていて、彼は、妻を殺された私怨によつても李陵軍を裏切るわけだが、これは、第三節の李陵が、故国の妻子を族滅され武帝を裏切るという行為に似ていなくもない。即ち、第一節の李陵は、妻子への恩愛などといった私情は切り捨て、そういった態度を他にも強請しているのであるが、第三節の李陵は、専ら妻子に対する愛情(故の怨み)によつて行動しているのである。このように見ると、第一節の彼と第三節の彼とは、その性格に矛盾があるようにも見えるのである。

だが、こうした表面上の矛盾は、勿論、性格の不統一といった質のものではないであろう。何故なら、第一節の李陵は、何よりも先ず五千の兵を率いる統率者として、詰りは漢の將軍としての役割を担つて行動しているからである。其処では、彼一個の存亡と軍全体の存亡とは一致しており、又、後者の方が優先されなければならない。没我的な彼の無私性は、何よりも先ず軍全体の利益を計り、漢から与えられた使命を第一として生きる他律的な行動原理によるものである。これに対し、第三節の彼は、既に五千の將兵を失ひ、統率者としての役割を喪失している。彼の行動原理は、「陵一個のこと」に限定される筈であり、そうした彼が、一武人として敗軍の責を償うに足る実効ある手柄を立てようとすれば、奪い取つた單于の首を漢へ齎し、是非とも

其の事実を明らかにする必要がある。もしなければ手柄は事実とはならず、軍功とはならないからである。それは、後に李陵自身が稍々取り違えているような、自己顕示的な功利追求ではない。小説「李陵」の素材たる「蘇武二答フル書」(『文選』)中の表現を借りれば、「…恩ヲ国主ニ報イント欲スルノミ。誠ニ以ラク、虚死スルハ節ヲ立ツルニ如カズ、名ヲ滅スルハ徳ニ報ユルニ如カズト。」ということにもなるであらうか。このように李陵には、尚、武人としての無私性は残存していたのだが、全軍と切り離された彼の状況は、否応なく其れを変化させ、稀薄化させざるを得ない。彼は、その無私性を保持しつつも、次第に内なる個人に目覚めてゆく。続いて、第三節の李陵は妻子を族滅されて憤るが、これも、又、彼が既に軍全体とは無縁な個人として在ったことを思えば当然であらう。それは、あの管敢のように、軍全体の中にあり乍ら規律を破り軍全体をより危険な位置に陥れるような形で示された妻への執着とは別のものである。管敢は、又、自らの落度を韓延年に罵倒された逆怨みによつて、李陵軍を裏切ったことにもなっている。先に述べた矛盾は、李陵の性格的分裂ではない。元々第一節の李陵も、無情冷酷なだけの人物ではなかった。最後の戦闘で、部下百名が確かに危地を脱し得たことを確認した後乱軍の中へと引き返した李陵は、部下思いの情愛を備えた人間であり、又、彼等の「絶対の信頼と心服」を得ていた人物でもある。

以上、要約してみれば、第一節の李陵は、陵一個のことと軍全体のこと(延いては漢帝国のこと)を重ね合わせた、謂わば、共同体的自我であり、第三節の彼は、次第に個体的自我として在ることを余儀なくされてゆく彼である。そうして共同体を離脱し他律的な行動原理を失った彼を支えるものは——、何も無かつたのである。一族を族滅された彼に残されていたものは、家族への余りに純粹な哀情や、敵匈

奴の左賢王にも友情を感じ得る、余りに素直な感受性に過ぎなかつた。それは、彼を導く行動原理としては、余りに心情的な思想以前のものではあつた。国家の安寧よりも個人の幸福を優先するが如き現代風の個人主義思想など、到底彼の思い付くものではなかつた。こうして内側から自己を支える思想を持たなかつた彼は、其の純粹な感受性に導かれつつ、外部状況の変化に誠実に対応し乍ら、常に対他的に存在する外はなかつた。第二章に論述する如く、彼が誠実であればある程、彼は対他的存在として在り続けなければならなかつた。そして、「考へることの嫌ひな彼」の意識が、現実状況を超えて、対自的な形而上的認識に深まるには、第二章に論述する如く、義人蘇武の帰国を實現させた「天」の意志に直面する時を待たなければならなかつたのである。

第二章 二つの「国」

共同体的自我と個体的自我は、勿論、全々別個に独立して存在し得るものではない。これ等は、寧ろ、同心円的な重なりを持つものであるが、第三節に再登場してきた李陵は、次第に前者から後者へと変貌してゆく。

彼を変えた第一のものは、且鞮侯单于の彼に対する態度である。单于是手づから李陵の縄を解き、賓客の礼を以つて彼を厚遇する。そして、その厚遇は、李陵が漢に対する軍略上の諮問を拒否した後も、依然として変わることはない。利用価値は無くとも、士を遇する為に士を遇するといった態度である。こうした单于の態度は、必然的に、同じ君主である武帝の其れを相対化するものとなる。武帝は臣下に対する猜疑心に捉われ、人間的信頼関係を持つことが出来ない。そうした武帝に比し、单于是遙かに望ましい君主である。李陵は、「とにかく此の单于是男だ」と感じ、次第に人間的な信頼を深めるようになるので

ある。

李陵を変えた第二のものは、この単于の長子たる左賢王との個人的友情である。漢との戦争の際にも、李陵は、全体としては漢軍の勝利を願いつつも、此の左賢王だけは負けさせたくないという願いを抱く。無意識の内に左賢王の戦績を気遣っている自分に気付いた時、李陵は激しく自分を責めるが、此処では、もう、明らかに漢の勝利を願う「公」の彼が後退し、友人の勝利を願う「私」の彼が前面に現われているのである。

尚、これらの記述は、小説「李陵」の素材たる『漢書』等には見受けられないものであり、中島の造型する李陵は、古典の中から抜け出し、次第に其の近代人的面貌を露わにしてゆくようである。

こうした李陵に、故国の老母妻子弟達の族滅の報が齎される。李陵は、武帝に対する憤りを如何することも出来ない。第三章で述べる「司馬遷の場合と違って李陵の方は簡単であった。憤怒が凡てであった」と中島は書いている。李陵と司馬遷が比較されつつ描かれたのは、作中この一ヶ所だけである。元々李陵には、漢朝に対する複雑な思いが内在していた。祖父李広及び叔父李敢が何故に非業の死を遂げなければならなかったのかというのが其れである。こうした李陵の漢朝に対する忠誠心は、此処で一挙に崩壊する。以後の彼は「人間が變つたやうに」見え、漢に対する軍略にも積極的に参加し、匈奴の右校王となり、単于の娘を娶るようになる。そして、自ら請うて漢への戦闘にも加わりとうとするが、曾ての戦場浚稽山麓に差しかかった時、曾て己に従って匈奴と死戦した部下達のことを思い、漢と戦う勇氣を失って俄かに退いてしまふ。

此処で、事実上、李陵の内部で国家というものは二つに分裂する。即ち、武帝の体現する漢朝と、家族や曾ての部下や友人に象徴される

故国の二つである。だが、李陵自身は、この二つを明確に区分して認識することは出来ない。李陵に対しては甚だ冷淡なもの言いであるが、思い切つて形而下的に言えば、以後の彼の苦悩は、この点に尽きるのである。確かに、その後の李陵は、諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかかる中華的偏見を脱し、表面を飾る漢人の陰險さよりも匈奴の粗野な正直さの方を好ましいとさえ思うようになる。それから、又、広野を疾駆し、秋天一碧の下「あ、我もと天地間の一微粒子のみ、何ぞ又漢と胡とあらんや」といったコスモポリタンの感慨を抱く時もあるのだが、彼がより広やかな認識者となればなる程、その心底に鬱積する故国への思いを如何ともし難いのである。

それを明確に意識させたのは、言う迄もなく、蘇武の存在である。常に対他的に存在する李陵の意識は、自己内部の葛藤という形をとらず、蘇武という外在する他者を媒介としてより明確なものとなる。此処で注目すべきは、諸家の指摘される如く、蘇武の内面が直接描かれることはなく、常に李陵の目によつて捕えられた蘇武の内面が描かれることである。従つて、蘇武が李陵に対して抱くという「富者が貧者に對する時のやうな——己の優越を知つた上」での寛大さも、その目に浮かぶという「かすかな憐愍の色」も、それが真に蘇武のものであるかどうかは定かではない。それは、寧ろ、李陵内部の苦悩が生み出した架空のものであろう。李陵は、漢にも単于にさえも知られることなく困苦の中に運命を笑殺して生きようとする自己完結的な蘇武の姿を前にして、曾て単于の首を窺い乍ら自分が其れを持つて匈奴の地を脱走し得なければ折角の行為が漢に聞こえないであろうことを懼れて躊躇した自分を恥じるのだが、これは、過度の自責であり、自己卑小化であると言わなければならない。こうした李陵内部の苦悩が、實際の蘇武とは関係なく、運命に対し意地の張り合いを挑み曾ての瘦我慢

を斯かる大我慢に迄發展させた義人蘇武という幻影を生み出すのである。こうした蘇武は、実は、李陵の在らまほしきもう一人の自己であり、それは、又、李陵が自ら埋葬した共同体的自我が亡霊として立ち現われてきた姿でもあった。武帝の訃報に接した時、その死を悼んで慟哭数日血を吐くに到る蘇武の姿を見て、李陵は、蘇武の中に「譬へやうも無く清冽な純粹な漢の國土への愛」を發見するが、これは、半ば以上李陵自身のものである。唯、李陵の場合には、その愛の發露は封印されているのである。李陵内部に漢の國土への断ち難い愛のあることは、後に漢の使節としてやって来た旧友任立政の帰国を促す言葉に激しく動揺する事実を見ても明らかである。

では、李陵は何故旧友の勧めを拒否し、断ち難い故国への思いに苦しみ乍ら帰国しなかつたのであろうか。この時点では、既に、憤怒の対象であつた武帝は亡く、胡地に於ける彼の苦惱に理解ある旧友達の手によつて、帰国の準備は順調に抄められていたのである。彼が漢に復歸したとしても、「再び辱しめらるゝ」怖れは無いようである。故国の妻子を族滅された時、李陵が背いたのは、厳密には武帝にであつて、その後漢兵と戦うことを忌避した彼は、漢そのものを裏切つたのではないともいえる。だが、先述の如く、李陵には、君主（武帝）と国家（漢）とを裁断して考えることは出来ないのである。彼にとつて武帝への返逆は、其儘漢への売国的行為となる。そうした自責の念に苦しむ李陵にとつては、一度裏切つた漢への復歸は倫理的に許されないことであり、若し其れを行えば、それは、又、現に禄を喰んでいる胡国に対する裏切りともなりかねないのである。再度の裏切りは、自己を鳥でも獣でもない蝙蝠的存在に陥らせることのようにも感じられたであろう。そして、それ等のこだわりを総て押し流す程の「抑へようとして抑へられぬ、こん／＼と常に湧出る最も親身な自然な」故国

への愛は、竟になかつたのだといわざるを得ない。それに、今更漢へ歸つた処で、もう老母妻子弟達は生存しないのである。強い家族愛に生きていた彼にとつて、故国というものの中核は何といつても家族であつた。今匈奴の右校王として胡国に根を下し、妻を娶り子迄儲けた彼にとつては、この世に生存する家族を振り捨て漢へ行くことは出来ないことであつた。さまよえる湖の如く、彼は、竟に、無限の精神的彷徨を続けなければならぬ存在であつた。

以上のように、李陵にとつて、国家とは漢朝と漢の國土との複合体であつたが、作者中島にとつて、国家とは一体何であつたか。以下、その点について、若干の臆断を挿入しておきたい。例えば、中島が「李陵」を書いていたのは、国体護持の名の下に、君主と国家とが不離のものとして存在していた社会であつた。大王の辺にこそ死なめという国家主義的思潮の強まってゆく中で、中島は、李陵のような懷疑に陥らざるを得なかつたのであろう。中島の国家観を知る直接の手掛かりは無いが、絶筆「章魚木の下で」等から類推してみると、彼が単純な国家主義者でなかつたことだけは確かである。又、朝鮮や満洲で過ごした少年時代に取材した、彼の一高時代の習作「巡查の居る風景」や「D市七月叙景一」、或いは未完の長篇「北方行」の中で、彼は、広大な中国大陸を放浪する旅行者や、日本帝国主義下の植民地で苦しむ異邦人の姿を同情的に描いている。それから、又、父祖伝来の儒家に生まれた彼は、血肉化した漢学の素養を持ち、日本一國の枠を超えた、広やかな漢字文化圏の世界観を有してもいた。それから、又、後年南洋パラオへ赴き、日本とはまるで違つた文化や価値観の下に生きる南洋の人々を發見している。彼の第二短篇集「南島譚」は、それ等の發見の記録とさえ見える。こうした彼には、謂わば、コスモポリタンの傾向があり、大日本帝国を相対化し得る国家観を持つていたと思わ

れる。

然し、又、国家とは、李陵が無意識の裡に感じていたように、我々にとつても、単に天皇制国家機構のみを意味しない。それは、同時に、国土であり、その上に生きる国民の謂でもある。李陵とは違つて近代の個我であつた中島にとつて、問題となるのは、そうした意味の吾が国土であり、吾が国民である。吾が国土とは、単に其処に生まれ其処に育つた場所というには余りに深く己の過去と結び付いたものであり、諸々の生活感情が其れに起因する処の何かでもある。又、吾が国民とは、最も具体的には吾が家族であり、血族であり、知人であるが、人間は、それ等に対する愛情の延長上に、心の故郷ともいふべき民族の伝統を発見するであろう。それは、又、無償の内に自己存在の確かさを保証してくれるものでもある。人間は、李陵のように其れと切斷された時、遂に自己とは何かを見失う外はないであろう。涙ぐましい程の家族愛を持つていたらしい中島の内にも、吾が国土や国民の像は存在していたであろう。「斗南先生」に見られるような或る種の屈折を持ち乍らも、彼は儒家たる血筋に愛着を持ち、東大国文科を卒業し、「尊大なる羞恥心」に悩み乍らも少数の優れた友人達に囲まれていた。だが、中島の精神の深部には、先に見たコスモポリタンの傾向の裏に、故郷喪失者の不安ともいふべき、共同体に対する帰属意識の稀薄さが隠されていた。東京に生まれ乍ら、生母との離別や第二、第三の母を迎えなければならなかつた不幸な家庭事情により、或いは埼玉の祖父母の手に預けられ、或いは、又、父の転勤に従つて奈良や静岡の地を転々とし、更には遠く朝鮮の中学を卒業した彼の生い立ちは、家庭や郷里、更には国家といつた共同体への帰属意識を奪ひ、孤立感を育むものであつた。初期の短篇「狼疾記」や「吾淨歎異」を見ると、中島は、無限空間の中を流星のように落下する孤独な自己のイメージを描いてい

るが、これは、少年時以来の不安の反映であろう。

作品「李陵」の中で、李陵の国家共同体への愛は、蘇武という触媒によつて凝固しかけたが、これは、矢張り、憧憬によつて増幅された観念であつて、李陵自身の其れは、最も自然な肉体的な強固さを持つものではなかつた。それ故にこそ李陵は、遂に漢への復讐を果たすことが出来なかつたのだが、此処には、或いは、中島自身の微妙な心情の投影があるのかも知れない。無論、主人公と作者とを同一視することは慎まなければならぬが、故郷喪失者たる中島も、李陵と同様に、自己存在の確かさを支える何かが決定的に失われていたことを痛感せざるを得なかつたのではあるまいか。こうした中島は、李陵や（李陵の憧憬する）蘇武の中にはなく司馬遷の中に、もう一人の自分を仮託しつつ、それを求めてゆく必要があつたのかも知れない。又、様々な意味で、李陵の悲劇は、司馬遷の悲劇と重ね合わされた時より、明らかなものとなり、李陵の舞い且つ歌うた漠北悲歌も、司馬遷の主調低音と協奏された時、より深い響きを持つものようである。

第三章 二つの「天」

論者は、「李陵」に於ける共同体的自我と個体的自我について、又、それ等に対応する二つの国家像について述べてきた。こうした李陵の分裂的な生を一層際立たせるものとして中島が用意したものは、司馬遷の其れであつた。先に此の作品の多極的構造について触れたが、この物語の中には李陵や司馬遷、武帝や单于、蘇武や衛律といった複数の人物が登場し、彼等は相互に複雑な対立図式を構成している。が、徒らに複雑な構想に誑されることなく、思い切つて単純化して言えば、その中でも最も重要なのは、矢張り、李陵と司馬遷の対比である。中島は、草稿断片の中で「李陵——司馬遷——漠北悲歌」と書き付けて

いるが、問われなければならないのは、矢張り、この二人の関係である。

李陵については前二章に詳述してきたが、司馬遷とは一体如何なる人物であるか。彼も、又、気紛れな武帝の意志に体现される運命に抗して、李陵とは亦別の悲劇的な生を送った人物であった。李陵は、初め、輜重の役を免ぜられんことを願ひ、自ら請うて漠北に出征した。が、その後の彼の運命を支配したのは、常に彼自身の意志の関知せぬところの何物かであった。老将軍路博徳の上奏文と其れに激怒した武帝の過酷な命令、韓延年に私怨を抱いた管敢の裏切り、乱軍の中の氣絶と捕縛、李緒と李陵の混同による李陵一家の族滅等々。こうして李陵は不可避免的に運命の翻弄に巻き込まれていった。一方、司馬遷の生き方は、李陵と比較すれば、少々主体的な意志に発するものであった。武帝の下問に対し敗軍の李陵を弁護したのも、彼の内なる正義感の発露であつた。然し、その後の宮刑は、彼の予期せぬものであつた。受刑後の蚕室の中で、彼の思索は次のように展開する。

彼は、先ず武帝を怨んだ。然し、歴史家としての彼が目覚めてくるにつれて、武帝の偉大さ（その長所も短所も含めて）を否定し去ることとは出来ない。「今度のことは要するに天の作せる疾風暴雨霹靂に見舞はれたものと思ふ外はないといふ考へが、彼を一層絶望的な憤りへと驅つたが、又一方、逆に諦観へも向はせようとする（傍点＝論者）。そして、憤りを武帝に向けることが出来なくなると、次には君側の姦臣に向ける。が、自矜心の強い彼には、彼等小人輩は怨恨の対象とすらなり得なかつた。結局、彼は、今度のことの原因を自己自身の存在に求めるのである。

動機がどうあらうと、このやうな結果を招くものは、結局「悪か

つた」といふなければならぬ。しかし、何處が悪かつた？ 己の何處が？ 何處も悪くなかつた。己は正しい事しかしなかつた。強ひていへば、唯、「我在り」といふ事實だけが悪かつたのである。

宮刑とは、士大夫を匹夫以下に墮し、あらゆる道德的資格のみならず人間そのものの尊嚴を根こそぎにする極限状況である。が、悪であるのは、司馬遷が宮刑を受けたからばかりではない。それ以前に己の存在それ自体が悪と規定せざるを得ないものであつて、生きていること、この世に在ること、それが、もう悪なのである。これは、もう、世界の存在そのものを悪と見る不条理な思想である。曾て中島は、「牛人」の中で「原始の混沌に根を生やした」「世界のきびしい悪意」に押し潰されてゆく叔孫豹の姿を描いたが、この司馬遷の認識は、それと同質のものである。そして、こうした思想に到達した司馬遷は、当然自殺を考える。然し、彼の内なる修史の仕事への思いが、其れを妨げる。

それは何よりも、その仕事そのものであつた。仕事の魅力とか仕事への情熱とかいふ怡しい態のものではない。（中略）更に昂然として自らを恃する自覺ではない。（中略）今度の事で、（中略）このやうな淺ましい身と成果で自信も自恃も失ひつゝした後、それでも尚世にながらへて此の仕事に従ふといふ事は、どう考へても怡しい譯はなかつた。それは殆ど、如何にいとほしくとも最後迄その關係を絶つことの許されない人間同志のやうな宿命的な因縁に近いものと、彼自身には感じられた。とにかく此の仕事のために自分は自らを殺すことができぬのだ（それも義務感からではなく、もつと肉體的な、此の仕事との繋がりによつてである）といふことだけはハッキリしてきた。

こうして太史令司馬遷の現身は消え、その代りに「完全に身を亡きものと思ひ込」み「知覺も意識もない一つの書寫機械」が蘇ったというわけである。

悽愴な努力を一年ばかり續けた後、漸く、生きることの歡びを失ひつくした後も尚表現することの歡びだけは生残り得るものだといふことを、彼は發見した。しかし、その頃になつてもまだ、彼の完全な沈黙は破られなかつたし、風貌の中のすさまじさも全然和らげられはしない。

此処では、実生活の中で「我」が押し潰されていく。そして、思想の中で第二の「我」が現われている。それは、実存的自我ともいふべきものである。確かに、表現することの歡びはあるが、彼の風貌の中のすさまじさが全然和らげられないのは、既に第一の「我」が死滅し、あの蚕室の中で到達した悪の思想を持続させた第二の「我」が存在しているからである。

そして、又、実生活への絶縁を完了し、世俗の諸々の功利性を削ぎ落した後、司馬遷は、それ自体の意味に於いて自律的に存在する表現者と化しているのである。そして、現実と没交渉な彼の表現するものが、謂わば、その絶頂の力で歴史的現実の中に大きな意味を持つとすれば、それは、彼の意識を超えた処の逆説である。彼は、専ら自己内部に下降することによって、まやかしの道徳や時代の常識的思想を突き破り、人間存在の深部に到達し、其処から人間精神の形を刻む表現者の宿命を掴み出して来たようである。こうした表現者の問題については、既に別の処で述べたこともあるので今は繰り返さないが、表現者司馬遷の自己存在の確かさは（それは彼になんらの安心も幸福も与

えるものではないが）、シェストフ風に言えば、虚無からの創造に基づくものであつた。これは、先に見た対他的認識者李陵の自己存在の不確かさに対し、或る一面で、一つの反措定のようにも見える。

この対自的認識者司馬遷の像は、或る一面で、「悟淨歎異」中の三藏法師や「弟子」中の孔子に連なるものであり、或る一面で、彼等とは決定的に異なるものでもある。悟淨の觀察する処によれば、三藏法師は、総ての解決を内に求める弱き強者であり、「所與を必然と考へ」その必然を自由と見做」そうとする自律的な人物であつた。それから、又、孔子は、子路の理解する処によれば、正が虐げられ邪が榮えるという現世の汚濁の中でも「與へられた範圍で常に最善を盡く」し、後世の人々の批判を待つという超時代的な木鐸としての使命を自覚した人物であつた。それは、優れた思想が本質的に有する現世での無力、無効といった逆説的榮光を荷つた人物でもあつた。これ等二人の悲劇的な思想家に対し、司馬遷も、又、宮刑という所与を必然と觀じ、その中で精神の自律を必死に求めようとする思想家であつた。但し、三藏法師は、常に永遠を透視するような其の眼差しによって、何時かは来る滅亡の前にそれでも可憐に花開こうとする叡智や愛情や、そうした数々の善きものの運命を凝視する人であつた。それから孔子の場合も、彼が遠望しているのは、道の正義が実現されるという理想であつて、だからこそ彼には「如何なる場合にも絶望せず」決して現實を輕蔑せず」粘り強く生きてゆく楽天主義が許されていた。こうした点では、彼等は、寧ろ、司馬遷とは対蹠的な人物である。司馬遷が凝視していたのは、存在そのものを悪と見る思想であつて、さればこそ彼は、一方で、魯仲連や藺相如の如き人物に仮託し乍らも、他方で、自ら眼を抉らしめた伍子胥や憤悶の内に汨羅に身を投じた屈原の如き書中の人物とも化したのである。彼には、もう、正義が実現されようと邪悪

が世界を支配しようと、それは問題ではない。孔子の「述べて作らず」という態度を継承し乍ら、其れを踏み越えてしまったように、司馬遷は、孔子とは決定的に異なる地点に迄踏み込んでしまった思想家であった。そして、更に、「史記」を書き上げ表現者でさえなくなった彼には、元より完成の欲びなどはなく、救いもなく、その脱殻は煙のように消えていった。後には「史記」百三十巻だけが遺り、それは、もう司馬遷とは無縁だとさえ言える。

又、一方、暗い自己懷疑に捉われた李陵の姿は、「悟浄出世」や「悟浄歎異」中の沙悟浄を想わせる。例えば、李陵が漠北の広野で呟く、「あ、我もと天地間の一微粒子のみ」云々と云った述懐は、「悟浄歎異」の末尾で広野の星空を見上げ乍ら沙悟浄が呟く述懐に似ている。又、流沙河の中で果てしない自己懷疑を続ける沙悟浄の正体は、その源にある「狼疾記」や「かめれおん日記」中の主人公であるが、先の李陵の述懐は、何事をも永遠の層の下に眺め、自己の生を無限空間の中を奔る一瞬の閃光のように考えていた「狼疾記」の主人公の述懐にも似ている。それから、又、李陵が蘇武に対して抱く憧憬は、沙悟浄が行動主義の天才孫悟空に対して抱く憧憬を想起させる。それは、又、「かめれおん日記」の主人公が疲れを知らぬ行動者「高等小学生的人物」吉田に感じた圧迫に発するものでもあろう。李陵の一面は、沙悟浄に繋がり、更に「狼疾記」等の主人公に繋がるのである。以上のような出自を透視しつつ、李陵と司馬遷を比較すれば、一層両者の対比は明らかであろう。

だが、李陵が真の意味で司馬遷と対比されるべき存在となるのは、次のような場面である。即ち、持節十九年の後漢に復帰する蘇武の姿を前にして、李陵が次のような運命的畏怖を抱く処である。

李陵の心は流石に動揺した。再び漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉大さに變りは無く、従って陵の心の苔たるに變りはないに違ひないが、併し、天は矢張り見てゐたのだといふ考へが李陵をいたく打った。見てゐないやうでゐて、やっぱり天は見てゐる。彼は肅然として懼れた。今でも己の過去を決して非なりとは思はな

いけれども(後略)

所与を必然と観じることの出来ない李陵にとっては、「天」も、又、唯己を嘲弄するだけのものではなかった。この「天」は、義人蘇武を天下に顕彰することにより、一見、正邪善悪を弁別し其の奥深い意志を現わしたものと見えるが、李陵にとつてみれば、罪なき故国の家族を族滅させ己を匈奴の右校王とさせ乍ら、此処で、又、蘇武の形を借りて李陵の過去を突き崩し、彼を嘲笑する執拗な悪意に満ちたものと映ったであろう。あの叔孫豹にとつて、一度は救済者と思われた「牛人」が実は自分を欺く狡猾な「世界の悪意」の体現者であったように、李陵にとつては、「天」を背負った蘇武は「崇高な訓誡」の仮面を付けた「いらだたい悪夢」であった。

だが、李陵は、逆に、蘇武を「いらだたい悪夢」の仮面を付けた「崇高な訓誡」ではないかと畏敬する。彼は、蘇武の背後にある「天」を「世界のきびしい悪意」を体現したものとは考えないのである。又、一方、「己の過去を決して非なりとは思はない」李陵は、あの司馬遷のように、自己の存在そのものを悪なるものと規定することも出来ないものである。結局、彼は、正邪善悪を弁別し其の意志を表わす「天」を容認し乍ら、自らは其の「天」の庇護下からも弾き出されてしまった存在であることを認知しなければならぬのである。此処で、彼は、謂わば、二重の孤独に陥っている。即ち、家族や故国から切断された

孤独と、「天」の律する道徳や倫理から疎外された孤独である。其処では、もう、善悪も是非も意味を持たない。彼は、唯、心の奥深く怖れるばかりである。

このように李陵が自己内部の魂から呼び出したものは、「天」であったが、彼が真に要請すべきは、「天」ではなく、寧ろ「神」であるべきだったかも知れない。例えば、万物の創造主たる基督教的唯一神は、天地に秩序を齎し、個我尊嚴の中核に「神の子」としての確信を賦与し、その精神の不滅を約束する。そして、現実ならぬ超現実の世界に永遠の安息と栄光を保証する。だが、個我存立の觀念を性急に輸入し乍ら、その背後にある「神」を拒否した近代日本の中で、中島が造型した李陵は、その自己存在の核心に何を支えとすればよいのであろうか。裁きではなく愛によって個我尊嚴の先驗的価値を保証する神を持たない国にあつて、淋しき個我は如何にして自己を支えればよいのか。李陵の未来について、中島は、李陵は又しても「心ならずも」匈奴の内紛に巻き込まれて、対外的に生き続ける外はないであろうとさりげなく書き記している。総てが失われ埋没されてゆく非情な歴史の推移の中で。

以上、論者は、「李陵」に於ける様々な自我の重層的構造について述べてきた。論者は、出来るだけ形而上学的懷疑の泥沼を迂回しつつ迷走してきたわけだが、主人公李陵は、前方に、蘇武の反近代的な没功利主義的な生き方を遠望しつつ、後方に、司馬遷の不条理な実存主義的な思想の影を背負って佇立していた。彼は、遂に、内発的な祖国愛を貫ぬいた義人でもなく、まして宿命的な表現者として蘇生していった偉人でもなかった。然し、最後に稍々恣意的な感想を付言するならば、論者は、ふと、鬼神にも似た司馬遷の、不幸とさえ言えないような「深い溜息」を聞くような気がする。それから、又、この不徹底な

る認識者李陵の苦悩は、過去から未来へと続く歴史の長城の中で、鋪石の如くに黙して生きる外はない吾々にとつて、決して無縁なものではないであろう。人間的な、あまりに人間的な彼の後姿は、漠北の砂塵に消えていったが、李陵「一卷を読む者の心の中に、再び、蜃気楼の如くに立ち現われてくるようにも思われる。

註1 例えば、三浦朱門氏は「中島敦の文学」(『近代文学鑑賞講座18・梶井基

次郎・中島敦』昭和34・12、角川書店)の中で、「実はその李陵をややつているのは、史記の作者である司馬遷であるという意味で、彼を中心に考えるべきである」と述べておられる。

註2 この点について最も詳しいのは、勝又浩氏「李陵」の構図(『日本文学』、昭和46・3)である。

註3 こうした点にやや関連して、木村東吉氏は「李陵」の構想(『日本文学』昭和53・5)の中で、司馬遷が「運命の非条理に支配される」世界を直視するのは、「史記」完成後の不安と虚脱感の中からであるとされるが、絶望的な書写機械と化し、屈原や伍子胥の烈伝を書いていた司馬遷が、「畢生の事業完成の歓喜」を期待しつつ書いていたとは思われず、蘇武の信念にではなく存在悪の認識に根差した表現者としての彼の有り様は、既に宮刑後に決定されていたと見たい。

註4 拙稿「中島敦論のころみ(一)―表現者の系譜を廻って―」(『近代文学試験』15、昭和51・11)を参照していただければ幸である。